

大学生の自己愛傾向がTwitter利用における ストレス反応に及ぼす影響

安中 幸恵 石津憲一郎

大学生の自己愛傾向がTwitter利用における ストレス反応に及ぼす影響

安中 幸恵 石津憲一郎

Influence of university students' narcissism on stress responses on using
twitter.

Yukie ANNAKA • Kenichiro ISHIZU

キーワード：自己愛傾向，ソーシャルネットワーキングサービス，ストレス反応

Keywords：narcissism, social networking serves(SNS), stress responses

I. 問題と目的

近年は情報化社会が進んでおり，インターネット利用者数が年々増加している。それに伴い，SNS（ソーシャルネットワーキングサービス）が著しく発展してきた。総務省(2012)によると，世界的に展開する最大のSNSサービスを提供しているFacebookの利用者は，既に9億人に達しているという。

では，一体どのような人がSNSを多く利用するのであろうか。Ryan & Xenos (2011)は，「自己愛傾向が強い人ほど頻繁にFacebookを利用し，写真の投稿や近況アップデートも多くなる」と述べている。同じくFacebookと自己愛傾向との関連についてウェスタン・イリノイ大学が2012年に行った研究によると，自己愛傾向の強いFacebook利用者は見知らぬ他人からの友人リクエストでも承認しやすく，見知らぬ他人からもソーシャルサポートを得ようとする傾向にあり，Facebook上でつながっている友人の数が1000人を超える利用者も存在しているという。自己愛傾向の高い人がより多くの友人とつき合おうとする理由について，小塩(1998)は「自己愛傾向が高いことは，自分自身に対する肯定的感覚を意味するが，その感覚は他者との比較の中において成り立っている。すなわち，特定の相手と接するよりも多くの友人と接している方が，比較の対象となる友人が多いため，自分自身の肯定的感覚を維持しやすいと言えるのではないだろうか」と述べている。自己愛傾向とSNS利用の関連についての研究は日本ではまだまだ発展しておらず，主にアメリカをはじめとした海外で行われている。内容として多いのは自己愛傾向とFacebook利用との関連について調査した研究である。理由としては，アメリカにおけるFacebook利用率が71%と非常に高いということが考えられる。Facebook

は主に「写真をアップロードして他者に公開する」ということを目的として用いられているSNSであり，ユーザーは公開された写真に「いいね!」と呼ばれるボタンを押すことで公開された写真への興味や共感を表したり，コメントを送信することで自分の感想を伝えたりすることができる。Ryan & Xenos (2011)は，どのようなパーソナリティ特徴がFacebook使用，不使用とどのように関連をもつのかについて検討し，調査の結果から，Facebook利用者は非利用者よりも外向的，自己愛的で社会的孤独に陥りやすいことが明らかにされている。また，Choi, Panek, Nardis & Toma (2014)は自己愛傾向の高い者がFacebookの利用によって本当に他者から注目を集めることに成功しているのかどうかについて調査を行った。この調査では，自己愛傾向の高い人々の自分の状況等について更新した記事に対するコメントの数や「いいね!」の数は，自己愛傾向の低い者が更新した記事に対するコメントの数や「いいね!」の数よりも少なくなるということが示された。この研究により，自己愛傾向の高い者はFacebookを「自己宣伝の場」としその存在に惹かれるが，一方で自分の投稿に対する他者からの反応は自己愛傾向の低い者に比べると得られにくく，結果として望んでいる「注目を集める」ということに成功していないことが明らかになった。

Facebookを分析対象とした研究よりは数が少ないが，Twitterを分析対象とした研究も存在する。Panek, Nardis & Konrath (2013)は分析対象のSNSにFacebookとTwitterの2つを選択して大学生と社会人を対象に調査を行い，これら2つのSNSと自己愛傾向のさまざまな要素との関連について検討を行った。調査の結果，FacebookとTwitterはどちらも自己愛傾向と関連をもつが，それぞれ異なる心理的ニーズを満たすために利用されているということが示されている。

Facebook は、大学生と社会人の両者において自己愛傾向の高い者により使用されているが、「自分の画像を提示し、その画像に対する他者の反応を見る」などというような、より「鏡」に類似した使い方をされていることが明らかになった。一方 Twitter は、自己愛傾向の高い大学生が自分の知覚優位性を他者にアピールするための手段、つまり「メガフォン」のような役割として使用していることが明らかになった。また、同研究では Facebook における投稿頻度が大学生においては自己顕示傾向のレベルと関連していることが示されたが、社会人においては関連が示されなかった。この結果は Carpenter によって 2012 年に行われた先行研究と異なるものとなっているが、Panek et al. はこの結果について、Carpenter の研究における調査協力者の平均年齢が 23.3 歳であったのに対し、Panek et al. の研究における社会人グループの平均年齢は 35.2 歳であり、同じ社会人のグループではあるがそれぞれのグループに年齢差があったことが原因の 1 つとして考えられるため、それらを考慮したさらなる検討が必要であると述べている。

一方、SNS の普及に伴って様々な問題が浮上しつつあり、そのうちの 1 つとして挙げられるものが「SNS 疲れ」と呼ばれる現象である。デジタル大辞泉 (2014) は、SNS 疲れを「SNS の長時間の利用に伴う精神的・身体的疲労のほか、自身の発言に対する反応を過剰に気にしたり、知人の発言に返答することに義務感を感じたり、企業などの SNS で見られる不特定多数の利用者からの否定的な発言や暴言に気を病んだりすることを指す」と説明している。2013 年に ICT 総研が実施した調査においても、12,000 人の調査協力者のうちの約 20% が「交流したくない人との連絡がづらい」、約 8% が「ちょっとした一言や誹謗中傷に傷つく」と回答しており、SNS の使用が個人の精神状態に影響を与えている可能性を示唆している。

先行研究より、自己愛傾向は健康的なプロセスとは言えないまでもその個人の精神的健康の維持に寄与することもあるが、それはストレスの少ない状況に限定されたものであり、ストレスの多い状況ではストレス反応を示しやすい、すなわちストレスに脆弱な素因であると結論づけられている (小西ら, 2008)。これらのことから、自己愛傾向にある人は SNS 上で多くの友人を持ち、SNS を積極的に利用するが、同時にストレスの多い SNS という環境において多大なストレスを感じている可能性があると考えられる。

自己愛傾向と SNS 利用との関係についての研究は今までも多く行われているが、自己愛傾向と SNS を使用することによって起こる「SNS 疲れ」におけるストレス反応との関係についての研究はほとんど行われていない。また、自己愛傾向と SNS 利用との関係についての先行研究は日本ではあまり行われておらず、アメリカを中心とした海外で多く行われているが、アメリ

カにおける先行研究には自己愛傾向と Facebook との関連について述べているものが多く、Twitter などその他の SNS を分析対象とした研究が少ない傾向にある。これにはアメリカでは Facebook 利用率が 72% と高く、Twitter 利用率が 23% と低いため (Pew Research Center, 2015)、アメリカにおいては Facebook が SNS の中心であり、Facebook を分析対象とすることに意義があると考えられているということが推測できる。それに対して、日本は Twitter 利用率が 42%、Facebook 利用率が 40% (ICT 総研, 2014) であり両者の利用率に差がほとんど見られない。また、自己愛の特性は青年期によく見られること (小塩, 1998) から大学生を調査対象とし、大学生においては Twitter の利用率が高いこと (Panek et al, 2013)、日本の現役学生の過半数が Facebook の利用に関して「ほぼ閲覧のみ」と答えていること (株式会社モノカイ, 2014) などから、現在の日本の大学生の間において最も普及している SNS は Twitter であり、大学生との関連についてより適切な検討を行うためには Twitter を分析対象とすることに意義があると判断したため、本研究では分析対象とする SNS を Twitter にしぼって検討を行うことにした。

以上のことから、本研究では Twitter を利用している大学生を調査対象とし、自己愛傾向が Twitter 利用におけるストレス反応に及ぼす影響について検討する。ここでは先行研究を参照にして、素因ストレスモデルの視点を取り入れることとする。自己愛傾向の高い大学生は、自己愛傾向の低い大学生よりも Twitter 利用におけるストレスに対して脆弱であり、その結果、ストレスにさらされると自己愛傾向の低い大学生よりも強いストレス反応が現れると予想される。それゆえ仮説として「自己愛傾向が高い大学生は、自己愛傾向が低い大学生よりも Twitter 利用におけるストレスに対して脆弱であり、その結果、ストレスにさらされると高いストレス反応を示す」を提示し検証することを目的とする。

II. 方法

(1) 調査協力者

調査協力者は、北陸地方の A 大学の学生 346 名 (男性 113 名、女性 230 名、不明 3 名、平均年齢 19.41 歳) であった。そのうち、「Twitter を利用している」と回答した者は 261 名 (男性 76 名、女性 185 名、平均年齢 19.50 歳) を分析対象とした。今回の調査協力者 346 名における Twitter 利用率は 75% であった。

(2) 手続き

調査時期は 2015 年 7 月から 11 月であり、大学の講義の時間に質問紙を配布して調査を行った。調査の実施にあたり、①調査は大学生の Twitter 利用について調査することを目的としているということ、②調査は匿名で行い、データは統計的に処理されるため名前などの個人

情報が公開されることは一切ないということ、③質問紙への回答や途中で回答中止は回答者の自由であり、回答の有無や回答中止によって回答者が何の不利益も被らないということの3点をフェイスシートに明記の上、口頭でも説明を行った。調査は2回行われ、1回目(Time1)の2週間後に2回目(Time2)を実施した。

(3) 調査内容

Time1とTime2それぞれの質問紙構成は以下の通りである。

< Time1の質問紙構成 >

①フェイスシート

調査に回答した日付、学部、学年、年齢、性別、携帯電話番号の下4桁の記入を求めた。携帯電話番号の下4桁に関しては、2回目の調査結果と一致させるためのみに用いるということを明記した上で、口頭でも説明を行った。

②自己愛人格目録短縮版(NPI-S)

小塩(1998)によって作成された尺度である。調査協力者の自己愛傾向を測定するために用いた。項目数は30項目で、「優越感・有能感」「注目・賞賛欲求」「自己主張性」の3つの下位尺度から構成されている。「1. 全く当てはまらない」～「5. とてもよく当てはまる」の5件法で、Twitter利用者にのみ回答を求めた。

③心理的ストレス反応尺度(SRS-18)

鈴木・嶋田・三浦・片柳・右馬埜・坂野(1997)によって作成された尺度である。調査協力者の心理的ストレス反応を測定するために用いた。「悲しい気分だ」、「いらいらする」、「怒りを感じる」などの18項目からなる。「0. 全くちがう」～「3. その通りだ」の4件法で、Twitter利用者にのみ回答を求めた。

④受動的SNSストレスイベント尺度

森・名取・小崎(2014)によって作成された尺度である。「受動的SNSストレスイベント」とは、「SNSサイトに登録し、閲覧しているだけで利用者自身に影響を及ぼすストレスとなるイベント」のことを指す(森ら, 2014)。調査協力者のTwitter利用におけるストレス反応を測定するために用いた。「他人の日常に関する記事・発言を見て嫉妬することがある」、「誹謗や中傷の記事・発言が目に入ると気が滅入る」などの15項目からなる。「0. 全くちがう」～「3. その通りだ」の4件法で、Twitter利用者にのみ回答を求めた。

< Time2の質問紙構成 >

①フェイスシート

内容はTime1と同様。

②インターネット利用上の不快な出来事(ストレス体験)尺度

河地・森脇(2012)によって作成された尺度である。Time2においてのみ、Twitterを利用している中で起こりうる不快な出来事(ストレス体験)、つまりストレスラーがどの程度あったかを測定するために用いた。「書

き込みで、下品なことばをみた」、「必要があって送ったメッセージやコメントへの返信がなかった」などの40項目のうち、Twitter利用に関する文章になるように教示文を改正し、重複した内容の項目を省いた36項目を用いた。「1. 全くなかった」～「5. とてもよくあった」の5件法で、Twitter利用者にのみ回答を求めた。

③心理的ストレス反応尺度(SRS-18)

内容はTime1と同様。

④受動的SNSストレスイベント尺度

内容はTime1と同様。

Ⅲ. 結果

本研究においては、因子分析の結果を重回帰分析に使用した場合、因子数の多さにより階層的重回帰分析の分析量が非常に多くなることから第2種の過誤が起こり、分析が適切に行われなくなる危険性があると判断したため、因子分析ではなく主成分分析を行った。分析のすべての結果について高い信頼性が得られたため、それらの結果を用いて後の分析を行った。主成分分析の結果はTable1～Table4に示した。また、各得点の最小値、最大値、平均値、標準偏差、 α 係数を記述統計としてTable5に示した。

続いて、各変数の相関について検討するため、Pearsonの相関分析を行った。各得点間の相関係数をTable6に示す。分析の結果、「自己愛傾向」においては、「心理的ストレス反応Time1」(以下、「心理的ストレス反応T1」とする)、「心理的ストレス反応Time2」(以下、「心理的ストレス反応T2」とする)との間で有意な負の相関が見られた(順に、 $r=-.20, p<.01$; $r=-.20, p<.01$)。一方、「不快な出来事(ストレス体験)」においては、「心理的ストレス反応T1」、「心理的ストレス反応T2」、「受動的SNSストレスイベントTime1」、「受動的SNSストレスイベントTime2」(以下、それぞれ「受動的SNSストレスイベントT1」、「受動的SNSストレスイベントT2」とする)との間で有意な正の相関が見られた(順に、 $r=.23, p<.01$; $r=.25, p<.01$; $r=.26, p<.01$; $r=.33, p<.01$)。また、「心理的ストレス反応T1」と「心理的ストレス反応T2」、「受動的SNSストレスイベントT1」、「受動的SNSストレスイベントT2」との間に有意な正の相関(順に、 $r=.71, p<.01$; $r=.58, p<.01$; $r=.48, p<.01$)、「受動的SNSストレスイベントT1」と「心理的ストレス反応T2」、「受動的SNSストレスイベントT2」と「心理的ストレス反応T2」との間に有意な正の相関(順に、 $r=.36, p<.01$; $r=.71, p<.01$)、「心理的ストレス反応T2」と「受動的SNSストレス反応T2」との間において有意な正の相関($r=.52, p<.01$)がそれぞれ見られた。

最後に、自己愛傾向とストレスラー(Twitter利用におけるストレス体験)と、その交互作用がTime2におけるストレス反応を予測しうるかを検討するため、Time2における「心理的ストレス反応」および「受動的

Table 1 NPI-S の主成分分析結果

	成分							共通性
	1	2	3	4	5	6	7	
7. 私は、周りの人達より有能な人間であると思う	.69	-.24	-.22	-.32	.15	.06	.20	.74
10. 私は、周りの人が学ぶだけの値打ちのある長所を持っている	.68	-.26	-.25	-.11	.13	.12	-.04	.64
16. 私は、周りの人に影響を与えることができるような才能を持っている	.67	-.36	-.25	-.09	.02	.10	-.03	.66
8. 私は、どちらかといえば注目される人間になりたい	.67	.50	.02	-.27	-.01	-.08	-.11	.79
4. 私は、周りの人達より、優れた才能を持っていると思う	.66	-.32	-.23	-.31	.21	-.09	.23	.79
2. 私には、みんなの注目を集めてみたいという気持ちがある	.66	.47	.04	-.25	.03	-.17	-.10	.75
20. 機会があれば、私は人目につくことを進んでやってみたい	.65	.32	.01	-.12	-.14	-.04	-.37	.69
26. 私は、人々の話題になるような人間になりたい	.64	.49	-.11	-.13	-.14	.15	-.22	.76
1. 私は、才能に恵まれた人間であると思う	.63	-.35	-.32	-.26	.23	-.11	.07	.76
23. 私は、みんなの人気者になりたいと思っている	.63	.51	-.01	.01	-.23	.03	.13	.73
25. 私は、どんなことでも上手くこなせる人間だと思う	.60	-.27	-.09	.02	-.09	-.16	.00	.48
21. いつも私は話しているうちに、話の中心になってしまう	.57	-.11	.10	.14	-.37	.12	.16	.54
29. 人が私に注意を向けてくれないと、落ちつかない気分になる	.56	.29	-.12	.08	.00	.48	.11	.66
15. 私は、どんなことにも挑戦していくほうだと思う	.54	-.28	.13	.21	.18	.04	-.30	.56
17. 私は、人々を従わせられるような偉い人間になりたい	.53	.15	-.03	-.16	-.08	.23	.02	.39
22. 私に接する人はみんな、私という人間を気に入ってくれるようだ	.53	-.26	-.10	.37	-.35	-.03	.16	.64
28. 周りの人達が自分のことを良い人間だといってくれるので、自分でもそうなんだと思う	.50	-.15	-.33	.20	-.12	-.03	-.23	.49
30. 私は、個性の強い人間だと思う	.48	-.05	.37	.25	.36	.28	.14	.66
13. 周りの人々は、私の才能を認めてくれる	.48	-.25	-.15	.36	.19	-.17	.04	.51
12. 私は、自分で責任を持って決断するのが好きだ	.48	-.21	.23	.05	.14	-.27	-.39	.57
18. これまで私は自分の思う通りに生きてきたし、今後もそうしたいと思う	.47	-.18	.09	.38	-.14	.09	.04	.43
6. 私は、控えめな人間とは正反対の人間だと思う	.46	-.11	.44	-.25	-.11	.12	.25	.57
27. 私は、自分独自のやり方を通すほうだ	.44	-.03	.28	.38	.31	.04	-.17	.55
11. 周りの人が私のことを良く思ってくれないと、落ちつかない気分になる	.16	.53	-.25	.29	.35	.31	.16	.69
14. 私は、多くの人から尊敬される人間になりたい	.43	.48	.01	.30	.08	-.26	.01	.58
24. 私は、自己主張が強いほうだと思う	.43	.08	.67	.03	-.07	-.07	.17	.68
3. 私は、自分の意見をはっきり言う人間だと思う	.44	-.19	.62	-.18	-.01	-.19	.23	.74
9. 私はどんな時でも、周りを気にせず自分の好きなように振る舞っている	.30	-.26	.41	-.16	-.07	.21	-.35	.53
19. 私が言えば、どんなことでもみんな信用してくれる	.39	-.17	-.27	.23	-.46	-.16	.07	.54
5. 私は、みんなからほめられたいと思っている	.40	.46	-.05	.13	.20	-.51	.24	.76

Table 2 SRS-18 の主成分分析結果

	成分			共通性
	1	2	3	
9. 気持ちが沈んでいる	.82	.00	-.12	.69
2. 悲しい気分だ	.81	-.08	-.29	.74
5. 泣きたい気持ちだ	.79	-.20	-.35	.78
12. 何もかもいやだと思う	.78	.00	-.02	.60
10. いらいらする	.76	-.31	.31	.77
4. 怒りを感じる	.76	-.39	.13	.75
13. よくないことを考える	.74	.14	-.24	.63
8. 不愉快だ	.72	-.23	.20	.61
1. 怒りっぽくなる	.71	-.33	.27	.69
15. なぐさめて欲しい	.69	-.12	-.26	.57
11. いろいろなことに自信がない	.69	.38	-.21	.67
6. 感情を抑えられない	.67	-.26	.21	.57
3. 何となく心配だ	.67	.28	-.26	.59
7. くやしい思いがする	.65	-.01	-.07	.43
14. 話や行動がまとまらない	.63	.39	.04	.63
16. 根気がない	.61	.41	.30	.63
18. 何かに集中できない	.59	.46	.40	.71
17. ひとりでいたい気分だ	.38	.29	.26	.30

的SNS ストレスイベント」を目的変数とし、「自己愛傾向」と「不快な出来事（ストレス体験）」、およびその交互作用項を独立変数とした階層的重回帰分析を行った。まずステップ1では「自己愛傾向」、「不快な出来事（ストレス体験）」、そしてTime1における「心理的ストレス反応」または「受動的SNS ストレスイベント」を共変量として投入した。次に、ステップ2では「自己愛傾

向」、「不快な出来事（ストレス体験）」、Time1における「心理的ストレス反応」または「受動的SNS ストレスイベント」、そして「自己愛傾向」と「不快な出来事（ストレス体験）」の交互作用項を投入し、分析を行った。結果をTable7, Table8に示す。

ステップ1で「心理的ストレス反応」を目的変数とした分析を行った結果、決定係数が有意であった ($R^2=.52, p<.01$)。また、「受動的SNS ストレスイベント」を目的変数とした場合においても決定係数が有意であった ($R^2=.53, p<.01$)。ステップ2では、「心理的ストレス反応」を目的変数とした場合において

は決定係数の変化量が有意ではなかったが ($\Delta R^2=.00, n.s.$)、「受動的SNS ストレスイベント」を目的変数とした場合においては決定係数の変化量が有意であった ($\Delta R^2=.01, p<.05$)。

「心理的ストレス反応」を目的変数とした場合においては、「不快な出来事（ストレス体験）」と「心理的ストレス反応 T1」の主効果が有意であった (順に、 $\beta =.11, p<.05$; $\beta =.67, p<.01$)。また、「自己愛傾向」と「不

Table 3 受動的 SNS ストレスイベントの主成分分析結果

	成分				共通性
	1	2	3	4	
4. 他人の記事・発言を見ると劣等感を感じることもある	.73	-.41	-.06	.12	.72
1. 他人の日常に関する記事・発言を見て嫉妬することがある	.70	-.47	-.04	.24	.76
8. 他人の, Twitter 上でつながっている人数が気になる	.68	-.05	.05	-.15	.50
3. 他人の記事・発言を見ていないと気が済まない	.66	-.14	-.06	-.40	.62
6. Twitter から一旦離れたりとすると, 孤独を感じる時がある	.66	.07	.12	-.53	.73
5. 他人の日常に関する投稿から, 自分の日常と他人の日常とを比較するときがある	.65	-.27	-.25	.10	.57
2. 他人が別の人と楽しく話している姿に嫉妬するときがある	.65	-.46	.10	.26	.71
13. 他人の記事・発言に更新がないと苛立つ	.61	.15	.32	-.29	.58
11. 自分の記事・発言の意図が伝わらずもどかしさを感じることもある	.56	.32	.22	.05	.47
9. 誹謗や中傷の記事・発言が目に入ると気が滅入る	.55	.37	-.53	.16	.74
7. 意識していないのについて Twitter を開いてしまう	.54	.21	-.16	-.20	.40
15. Twitter 上で他人同士の会話に入りたくても入れない	.47	.19	.42	.20	.48
12. 関係を切りたいユーザーを切りたくても切れない	.43	.40	.16	.10	.38
10. 他人のネガティブな記事・発言を見ると気が滅入る	.46	.42	-.59	.14	.76
14. 現実での知り合いと Twitter 上でつながっていることに窮屈さを感じる	.42	.33	.40	.45	.66

Table 4 不快な出来事 (ストレス体験) 主成分分析結果

	成分						共通性
	1	2	3	4	5	6	
18. 知人からのメッセージやコメントの内容が冷たかった	.76	.02	-.37	-.30	-.07	.04	.80
23. 自分の質問の意図を理解してくれなかった	.75	-.24	-.17	.42	.16	-.06	.86
21. 中傷された	.75	-.38	.07	-.06	-.21	-.26	.83
20. 知人から中傷された	.75	-.39	.05	-.07	-.27	-.21	.84
19. 知人から不当な非難をうけた	.75	-.40	.08	-.02	-.30	-.17	.84
15. 必要があって送ったメッセージやコメントの返信がなかった	.75	.00	-.42	-.17	.17	.02	.80
12. 他者からの書き方に必要以上のなれなれしさを感じた	.73	.26	-.12	-.04	-.26	.05	.69
22. 自分の書いた言葉を誤解してうけとられた	.73	-.23	-.15	.44	.09	-.06	.81
14. 見知らぬ相手なのに, 相手が自分に敬語をつかわなかった	.71	.03	-.22	-.21	.05	.13	.63
36. 自分の所属団体の悪口が書いてあるのをみた	.71	-.29	.16	-.14	-.32	.09	.75
24. 自分が書いたことが相手に思うように伝わっていなかった	.71	-.15	-.20	.54	.06	-.09	.87
17. 知人が自分の書き込みにだけ反応をしてくれなかった	.70	-.04	-.40	-.42	-.02	-.01	.83
30. 悩みを打ち明けたが親身なコメントがなかった	.67	-.39	.08	-.05	.25	-.15	.70
32. 自分にとっては大切なことを相談したかったのに知人から返信がなかった	.67	-.41	.07	-.11	.26	-.16	.73
31. 真剣な相談をしたのにはぐらかされた	.67	-.45	.16	-.07	.18	-.13	.73
33. 名前や学校名を出して中傷しているのをみた	.65	-.21	.31	-.05	-.05	.11	.59
2. 他者同士が争っている文章をみた	.65	.46	.15	-.17	.16	-.27	.79
35. 自分の好きなもの・人が中傷されていた	.65	-.03	.04	.13	-.13	.40	.62
16. メッセージやコメントの交換をしていて, 返信がなくなった	.65	.05	-.51	-.02	.18	-.02	.72
11. 自分の思う一般的な常識からひどくはなれた意見をみた	.64	.45	-.01	.06	-.10	-.05	.63
5. 他者が何人かで一人の人を中傷しているのをみた	.64	.35	.29	-.11	.11	-.13	.65
25. 軽い冗談の気持ちで書いた言葉に対して深刻に返されてしまった	.63	-.26	-.06	.43	-.08	-.05	.66
1. 他者が互いを誹謗・中傷しあっている書き込みを見た	.62	.47	.17	-.10	.15	-.33	.78
13. 知人が発していた内容が自分の考えと不一致なものだった	.61	.38	-.08	.00	-.04	.09	.53
6. マナーのない書き込みをみた	.61	.54	.15	.11	-.01	-.05	.70
4. 人を見下すような書き方をしているのをみた	.61	.52	.26	.07	-.01	-.11	.73
8. 芸能人への批判・中傷をみた	.59	.41	-.01	.02	.10	.29	.61
34. 自分の知人の悪口が書いてあるのをみた	.58	-.23	.22	.01	-.52	.15	.73
10. やりとりするときにあるべき丁寧さが相手になかった	.57	.41	-.10	.00	-.21	.13	.56
27. 知人の書き込みに自分の実名が書いてあった	.56	-.19	.09	.07	.28	.24	.49
7. 事件などについて, 自分とは違う立場の意見の書き込みをみた	.56	.47	.11	-.03	.11	-.05	.56
28. 自分の名前が勝手に使われていた	.55	-.23	.27	-.11	.31	.41	.71
29. 自分の情報を勝手に書き込まれていた	.55	-.23	.28	-.04	.23	.39	.64
26. 自分の連絡先を知らないところで書き込まれた	.54	-.43	.10	-.25	.04	-.04	.56
3. 書き込みで, 下品なことばをみた	.53	.52	.21	.16	.05	-.05	.63
9. ひわいな広告が書き込まれているのをみた	.51	.37	-.13	.09	-.22	.23	.52

不快な出来事 (ストレス体験) の交互作用については有意な関連が示されなかった ($\beta = .02, n.s.$)。

「受動的 SNS ストレスイベント」を目的変数とした場合においては、「不快は出来事 (ストレス体験)」と「受動的 SNS ストレスイベント T1」の主効果が有意であった (順に, $\beta = .17, p < .01; \beta = .69, p < .01$)。また、「自

己愛傾向」と「不快な出来事 (ストレス体験)」の交互作用が有意であった ($\beta = .11, p < .05$)。交互作用の詳細について下位検定を行った結果、「自己愛傾向」が高い者は「不快な出来事 (ストレス体験)」による影響力が強くみられるが ($\beta = .29, p < .01$)、一方「自己愛傾向」が低い者は「不快な出来事 (ストレス体験)」の影響を

Table 5 記述統計量

	最小値	最大値	平均値	標準偏差	α 係数
自己愛傾向	23	108	60.15	13.38	.91
心理的ストレス反応 T1	0	54	19.39	12.57	.94
受動的 SNS ストレスイベント T1	0	36	9.97	7.05	.85
心理的ストレス反応 T2	0	54	16.68	12.47	.94
受動的 SNS ストレスイベント T2	0	31	8.71	6.91	.85
不快な出来事 (ストレス体験)	36	147	64.58	23.64	.96

Table 6 各得点間の相関係数

	自己愛傾向	心理的 ストレス反応 T1	受動的 SNS ストレスイベント T1	心理的 ストレス反応 T2	受動的 SNS ストレスイベント T2	不快な出来事 (ストレス体験)
自己愛傾向	1	-.20**	.11	-.20**	.07	.07
心理的 ストレス反応 T1		1	.58**	.71**	.48**	.23**
受動的 SNS ストレスイベント T1			1	.36**	.71**	.26**
心理的 ストレス反応 T2				1	.52**	.25**
受動的 SNS ストレスイベント T2					1	.33**
不快な出来事 (ストレス体験)						1

** $p < .01$

Table 7 心理的ストレス反応を目的変数とした階層的重回帰分析結果

説明変数	Step1	Step2
切片	.01	.01
自己愛傾向	-.06	-.07
不快な出来事 (ストレス体験)	.11 *	.11 *
心理的ストレス反応 T1	.68 **	.68 **
自己愛傾向×不快な出来事 (ストレス体験)		.02
R^2	.52 **	.52 **

** $p < .01$, * $p < .05$

Table 8 受動的 SNS ストレスイベントを目的変数とした階層的重回帰分析

説明変数	Step1	Step2
切片	.04	.03
自己愛傾向	-.02	-.03
不快な出来事 (ストレス体験)	.17 **	.17 **
受動的 SNS ストレスイベント T1	.70 **	.71 **
自己愛傾向×不快な出来事 (ストレス体験)		.12 *
R^2	.53 **	.54 **

** $p < .01$, * $p < .05$

ほとんど受けない ($\beta = .05$, *n.s.*) ということが示された (Figure1)。

IV. 考察

本研究は、大学生の自己愛傾向と SNS 利用におけるストレス反応との関連について注目し、Twitter が現在の日本の大学生の間で最も普及している SNS であると推測したうえで、自己愛傾向と Twitter 利用上でのストレスサーとの交互作用が Twitter 利用におけるストレス反応に及ぼす影響について明らかにすることを目的としたものであった。先行研究を参考とし、「自己愛傾向が高い大学生は、自己愛傾向の低い大学生よりも

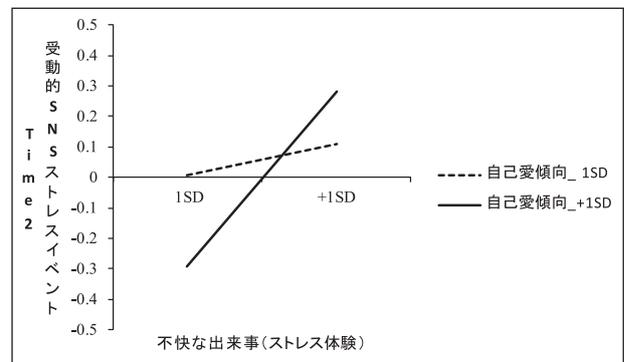


Figure 3 Time2 における受動的 SNS ストレスイベントに対する自己愛傾向と Twitter 利用における不快な出来事 (ストレス体験) の交互作用

Twitter 利用におけるストレスサーに対して脆弱であり、その結果、ストレスサーにさらされると高いストレス反応を示す」という予測をたて、これを仮説とした。大学生を対象に 2 週間の期間をあけて合計 2 回の質問紙による調査を行い、1 回目の調査では調査協力者の自己愛傾向とストレス反応の程度、2 回目の調査では 2 週間のストレスサーとストレス反応の程度をそれぞれ測定した。相関分析を行ったところ、「心理的ストレス反応」と「受動的 SNS ストレスイベント」はどちらも「不快な出来事 (ストレス体験)」との間に有意な正の相関がみられ、「心理的ストレス反応」と「受動的 SNS ストレスイベント」の間にも有意な正の相関がみられた。こ

これらの結果から、これら2つの変数はどちらもストレス反応を測定することができる変数であると判断し、「心理的ストレス反応 T2」,「受動的 SNS ストレスイベント T2」の2つをそれぞれ目的変数として階層的重回帰分析を行った。分析の結果、「心理的ストレス反応 T2」と「受動的 SNS ストレスイベント T2」のどちらを目的変数とした場合においても「不快な出来事（ストレス体験）」の主効果が有意であり、Twitter 上でストレスにさらされると、「自己愛傾向」の高低に関わらず様々な形でストレス反応が現れるということが示された。また、「受動的 SNS ストレスイベント T2」を目的変数とした場合においては、「自己愛傾向」と「不快な出来事（ストレス体験）」との交互作用がみられた。下位検定の結果、ストレス得点が低い状態においては「自己愛傾向」の高い者は「自己愛傾向」の低い者よりもストレス反応得点が有意に低いことが示され、このことからストレスの少ない環境では「自己愛傾向」が精神的健康を保っているということが示唆された。また、「自己愛傾向」の高い者はストレス得点が高い状態になるとストレス反応得点が高くなることから、「自己愛傾向」はストレスに対して脆弱な素因であるということが示され、これらの結果は先行研究を支持するものとなった。しかし、ストレス得点が高い状態において「自己愛傾向」の高い者と低い者、それぞれのストレス反応得点については有意な差がみられなかった。このことから、「自己愛傾向が高い大学生は、自己愛傾向の低い大学生よりも Twitter 利用におけるストレスに対して脆弱であり、その結果、ストレスにさらされると高いストレス反応を示す」という本研究の仮説は一部支持される形となった。具体的には、「自己愛傾向が高い大学生は、自己愛傾向の低い大学生よりも Twitter 利用におけるストレスに対して脆弱である」という部分については仮説が支持されたが、「その結果、ストレスにさらされると強いストレス反応を示す」という部分については仮説が支持されなかった。ストレスが多い状況において、「自己愛傾向」の高い者と低い者との間になぜストレス反応得点の差がみられなかったのかについては今後さらなる検討が必要であるが、原因として考えられる事柄としては調査協力者のうち分析対象とすることのできた人数がやや不足気味であったことや（346名の調査協力者のうち、分析対象となったのは261名であった）、分析対象となった調査協力者の男女比が均等ではなかったこと（男性の人数が76名であったのに対して、女性の人数は185名であった）などが挙げられる。これらの要因について調整した上で再度調査を行い、これらの要因によって結果が変わってくるのか、もしくは他に何らかの原因があるのかについてさらに研究を進めていくことが必要であると考えられる。

一方で、「心理的ストレス反応 T2」を目的変数とした場合においては「自己愛傾向」と「不快な出来事（スト

レス体験）」との間に有意な交互作用はみられなかった。これは小西ら(2008)の見解や本研究の仮説とは異なるものであり、「抑うつ」や「怒り」といった心理的なストレス反応は、Twitter 上のストレスによって引き起こされるものであるということは確かであるが、一方で「自己愛傾向」との関連はほとんどないということが示唆された。このような結果に至った原因としては、「心理的ストレス反応」の項目内容は「受動的 SNS ストレスイベント」の項目内容と比べると「悲しい気分だ」や「怒りを感じる」などといった抽象的なものがほとんどであり、これらの反応は Twitter 利用以外の場面においても多くみられる可能性があるため、これらの反応が Twitter 利用上のストレスによる反応なのか、現実世界での他のストレスによる反応なのかが区別しにくくなり、「自己愛傾向」得点や「不快な出来事（ストレス体験）」得点とは関係なく、何らかの他のストレスが原因となって「心理的ストレス反応」得点が高いという結果となった者が少なからず存在したのではないかと考えられる。実際に、本研究の調査時期は大学の試験前もしくは試験期間と重なっていたり、夏休みが明けてから1回目の講義であったりと、「Twitter 利用とは全く関係がないが、多くの大学生にとってストレスとなりうる出来事」が多く存在していたということが推測され、このことが「心理的ストレス反応」の結果に影響を及ぼしたということが可能性のひとつとして考えられる。一方、「受動的 SNS ストレスイベント」に関しては、「他人の日常に関する記事・発言を見て嫉妬することがある」など項目内容が具体的であり、対象となる場面が Twitter 利用上での場面に限定されるため、現実世界での他のストレスと Twitter 利用におけるストレスが調査協力者の中で自然と区別されやすくなり、より適切に Twitter 利用上のストレスによるストレス反応について測定できたのではないかと推測される。これらのことから、研究をより質の高いものにしていくためには、調査時期やそれによって考えられる他のストレス要因を考慮した上でさらに詳しく検討を行うことが必要であると考えられる。

最後に、本研究の結果のまとめと、今後の課題について述べる。本研究では、自己愛傾向が高い者はインターネット上でのストレスに対して脆弱であるか否かを検討することを目的として、心理的ストレス反応と受動的 SNS ストレスイベント尺度の2つを従属変数とした、階層的重回帰分析を行った。その結果、自己愛傾向が高い者がよりストレスに遭遇すると、受動的 SNS ストレスが高まることが示された。課題としては、本研究では調査対象を Twitter 利用者にしてばって検討を行った。そのため、Twitter 非利用者については自己愛傾向やストレス反応を測定しておらず、詳しい検討を行っていない。今後は、Twitter 非利用者の自己愛傾向やストレス反応も測定し、検討を進めていく必要があると

考えられる。Twitter 非利用者の中でも、今まで一度も Twitter のアカウントをもったことがない者と、以前は Twitter をやっていたが何らかの理由で Twitter をやめた者とは分析結果が異なるという可能性も十分に考えられる。今後は、以上のことを考慮した上で Twitter 利用者と Twitter 非利用者との比較、または一度も Twitter をやったことのない者と以前は Twitter をやっていたが現在は Twitter をやっていない者との比較など、様々な視点から検討を行っていく必要があると考えられる。

V. 引用文献

- American Psychiatric Association (1994). Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders: DSM-IV.
- Carpenter, C. J. (2012). Narcissism on Facebook : Self-promotional and anti-social behavior. *Personality and Individual Differences*, 52, 482-486.
- Choi, M., Panek, E. T., Nardis, Y., & Toma, C. L. (2014). When social media isn't social: Friends' responsiveness to narcissists on Facebook. *Personality and Individual Differences*, 77, 209-214.
- Duggan, M. (2015). Mobile Messaging and Social Media 2015. Pew Research Center Internet & Tech. <http://www.pewinternet.org/2015/08/19/mobile-messaging-and-social-media-2015/>
- Gabbard, G. O. (1994). *Psychodynamic psychiatry in clinical practice: The DSM-IV edition*. Washington: American Psychiatric Press.
- ICT 総研 (2013). 2013 年 SNS 利用動向に関する調査
- ICT 総研 (2014). 2014 年度 SNS 利用動向に関する調査
- ICT 総研 (2015). 2015 年度 SNS 利用動向に関する調査
- 株式会社トモノカイ (2014). 大学生の SNS の利用実態
- 上地雄一郎・宮下一博 (2005). コフォートの自己心理学に基づく自己愛的脆弱尺度の作成 パーソナリティ研究, 14, 80-91.
- 加藤千枝 (2013). 「SNS 疲れ」に繋がるネガティブ経験の実態—高校生 15 名への面接結果に基づいて 社会情報学, 2, 31-43.
- 河地由恵・森脇愛子 (2012). 大学生におけるインターネット利用上の不快な出来事 (ストレス体験) 尺度の作成 帝京大学心理学紀要, 16, 1-10.
- 川崎直樹・小玉正博 (2007). 親和動機のあり方から見た自己愛傾向と対人恐怖傾向 パーソナリティ研究, 15, 301-312.
- 小西瑞穂・山田尚登・佐藤豪 (2008). 自己愛人格傾向についての素因—ストレスモデルによる検討 パーソナリティ研究, 17, 29-38.
- 森丈弓・名取洋典・小崎茉貴 (2014). SNS 疲れを測る (1) 受動的 SNS ストレスイベント尺度の作成 日本心理学会第 78 回大会
- 中山留美子・中谷素之 (2006). 青年期における自己愛の構造と発達的变化の検討 教育心理学研究, 54, 188-198.
- 小川美香子 (2012). SNS 研究の動向 経営情報学会全国研究発表大会要旨集, 2012f(0), 315-318.
- 小塩真司 (1998). 青年の自己愛傾向と自尊感情, 友人関係のあり方との関連 日本教育心理学研究, 46, 280-290.
- 小塩真司 (1998). 自己愛傾向に関する一研究—性役割観との関連— 名古屋大学教育学部紀要 (心理学), 45, 45-53.
- Panek, E. T., Nardis, Y., & Konrath, S. (2013). Mirror or Megaphone?: How relationships between narcissism and social networking site use differ on Facebook and Twitter. *Computer in Human Behavior*, 29, 2004-2012.
- Pearse, D. (2012). Facebook's 'dark side': study finds link to socially aggressive narcissism. The Guardian tech. <http://www.theguardian.com/technology/2012/mar/17/facebook-dark-side-study-aaggressiv-narcissism>
- Ryan, T., & Xenos, S. (2011). Who uses Facebook? An investigation into the relationship between the Big Five, shyness, narcissism, loneliness, and Facebook usage. *Computers in Human Behavior*, 27, 1658-1664.
- 相良麻里 (2006). 青年期における自己愛傾向の年齢差 パーソナリティ研究, 15, 61-63.
- 清水健司・海塚敏郎 (2002). 青年期における対人恐怖心性と自己愛傾向の関連 教育心理学研究, 50, 54-64.
- 小学館 (2014). デジタル大辞泉
- 総務省 (2012). 平成 24 年度版 情報通信白書
- Stolorow, R. D. (1975). Toward a functional definition of narcissism. *International Journal of Psychoanalysis*, 56, 179-185.
- 鈴木伸一・嶋田洋徳・三浦正江・片柳弘司・右馬埜力也・坂野雄二 (1997). 新しい心理的ストレス反応尺度 (SRS-18) の開発と信頼性・妥当性の検討 行動医学研究, 4, 22-29.

(2016年8月25日受付)

(2016年10月5日受理)